

# 教育大學新日記

東京教育大學新樹會  
7月4日号  
号外 No. 9

# 七・六評議会団 交要求—七・二斗争委

改日、和室で理学部より田岡のストライキに突入  
部学生大会が開かることになった。ストライキは採  
れた。結果は出されず多少対立がみられたが、スト  
れど、二六日学生ライキブローカンとして、一、學  
大会の行動の総括長・岸部長田文男、二、審議会公  
の後、説明につい第一、学生の意見の反映の場を保護  
ての商談、方針のせよ、三休み中の一切の活動監禁  
説明、質疑応答をするが、先のストライキでは支  
なされた。討論の井が少しだけアピールの正式のストラ  
クで、ストライキバイキスローカンによるむらおかっせ  
は學生の本分にあが、一、一〇説議会田原徹回  
どるところを見、二、一九文部省文書取り扱いの二  
般行部は構成に反対を斗争スローカンとしていたた  
対し、こうの姿勢たかうことを確認された。斗争形態と  
自分は条件付で舊しては、各クラスから七人に一人  
成たから、執行部の斗争委員を選出する。斗争委員  
を不信任するに今は、今日、正義に向かへる。

「緊急動員はござ  
出たが、五時すぎ  
成立した状態で、  
会 哀 捜 理 教  
微底した  
スト攻勢

参加三五回、内、理・学生大会終了後、学生のスケルトン（一〇一）で、決定の情報をキヤッキした産業専門学校が、教習会は、学生委員会を含む主要（一九五・反六メンバー）幹部委員会にて召集され、（二九）以後八時から、大田の駅前（二九）に人で埋め尽くされ、タクシードライバーたちも、一年間で一千台以上乗車した。

右会は學望書を提出し、學生の  
回文に応じよと要求した。理  
學部教授会は、教授会終了後、  
學部學生の代表とのみ、懇談会  
形式で会々することを申し合た。  
　昨日の教授会での主要な説明  
は、學生のストライキにどう対  
応するかということで、指導者  
は退学処分にすべしといふ強硬  
な態度で臨んでいい。また、學  
長を動かして學内に抗動隊を導  
入するなども、余断を許さない

本日理学部学生がアスリートとして一大爆キヤンパスとして勝ちとるべくアスリート精神確立大きく創造したことを行はせらばに。だが、この問題がスムーズに解除せぬばかりだことを考へるならば、理学部が民主的運営で立ち上げた一定の危惧を拔下かけざるを得ない次元での実行贊成が多いことから、運動における頭波問題にのみかれる姿勢をむきする必要がある。

“説得工作”は責  
任回避にすぎない

主張

文革部では教授会の後、六時半から一時半、学生に対する説明会が行われた。その中で教授会の攻勢にも注目して、文教授会の対革長会見あつ旋いで、会からも、会見現のためにはとして本日教室懇談会での解説が一つの条件となり得るということが強調され、外観的には、教授側の要望露呈の場であることは、教職員が自ら化できないうが教員は団文ができるからだからと云ふ。これに対して学生は方向を学生に向けるのである。この争議は彼等が声印を自ら化できないうが教員は団文ができるからだからと云ふ。これが明確な返答は見られないに突入したのであり、解説会への転落を意味した。

ために机を持ち出したことに對して、田有財産を効かすなどといつた理學部教授鶴先生に向う。この前一晩して半生をしの出し、病歿を強行し、教育大と云う嘲諷的人の如即財産を、教育大と云う地位をもつて权力といふ暴力区々ぐに合法的に動かそうとしているのは誰だの如に枚柏の如く。そして 本日六時より理學部教授鶴先生の死を知らる。我々先生のバリケード破壊は、彼らが我々にこそストを説得する能理をまったく持たないに味こよ出來でを証明する。

この日の説明会は、教援側七  
数人、学生は百人弱の参加に組  
まり、内容的にも、不活発なま

我々が要求するには、教授が自ら立場においてする言語具体化の行なのである。専門審議会は教授が

の杆村、管理杆村における地位をもつて動合志的假面をかぶりながら、務監を襲行することこそ暴力なのである。

のであるに。なお、同委員会は  
本日各教室毎に教室会議を開く  
ことを決起し、積極的な説得工  
作の動きを見せ始めてゐる。

任を放棄した上で帝王にも斗争を棄てようとするものであり、絶世苦しみなればならぬ。竜波向はスクモ解説することでは解決で

放對是